新　刊　Book reviews

□岡本素治（監修），小林正明，脇山桃子，佐治康生（撮影），上路ナオ子（イラスト）：**種子のデザイン・旅するかたち**　21 × 20.5 cm，72 pp．2011. ¥1,500+ 税．LIXIL 出版．ISBN 978-4-86480-700-5

本書は東京・京橋の LIXIL ギャラリーにおける，表題の展示に合わせて刊行されたもので，100 種類を超える散布体（いわゆる種子）が，植物の繁殖戦略ごとにまとめられ，細部にまで気配りした拡大カラー写真に，ソフトな植物学的説明が付け加えられていて，自然史関係展示にしては贅沢な，ゆったりと配置された図録になっている．この展示や図録は，造形美の観点を強調しているのだろう．こういう教科書的でない見せ方で，見過ごしてきた自然の美や面白さに，気付く人達が増えてくれれば，歓迎である．被写体となった「種子」は，大阪市立自然史博物館と，兵庫県立人と自然の博物館の所蔵標本が大部分を占める．

文字はすべて縦書きだが，学名やスケールバーもこれにならって縦に配置されている．学名は写真のサイズが異なれば，それに応じてポイントが異なる．スケールバーは，見開き 2 頁の写真がみな同縮尺なら、どこか一ヶ所にしか表示されていないが，縮尺の異なる写真があるときには，それぞれに示されている．原則として，右頁には大きな枠で一点の写真，左頁には小さな枠で数点が収めてあるようだが，大きい枠だからといって大きな種子が入っているとは限らない．そんなこんなを数え上げて行くと，頁番号の付けかたに至るまで，本書のデザインは非常に凝ったものだと思う．

6 頁のキリの種子は（表紙裏も），ルーペで見た覚えはあるが，これだけ拡大されると，あらためてため息が出る繊細さである．イタドリの「タネ」は二枚の翼が細脈まできれいに見えている上，三枚目の翼は垂直に立っているはずなのに，その細脈もまたはっきり見えている．写真のバックはどれも同じ灰色に統一されていて，一部分でも黒いバックにしたら，綿毛や繊維がもっとよく見えるのにと思うところもあるが，これは「教える」立場からの注文だと気付く．

繁殖戦略と言っても，「風に乗って旅をする」「漂流する冒険者たち」「動物との巧みな駆け引き」の三つで，それらのどれにも当てはまらないものも当然あるが，こだわらずに適当なところにはさんである．それよりは一つ一つの表題が，興味をそそるように工夫されている．その合間に COLUMN と題する小話がいくつか挿入されている．野外観察でときどき出会うクルミの破片は，その傷痕からネズミの食痕かリスのそれかがわかるのだが，動物園のリスは，喰う作法を知らないらしいとのこと．あちこちにかわいらしいカラーイラストが点在していて，精密な接写を見て凝った肩の力を抜いてくれる．

最後に，岡本：果実の理論（ボクが木の実ならこう考える），小林：葉っぱを工夫した種子の旅支度，脇山：時空を超える旅人，の三点のエッセイが、頁の色を変えて現れる．勉強というより，眼を休ませてくれる本であるが，そのつもりになれば，数多くの発見があるだろう．植物を知らない人にもお薦めできる．LIXIL 出版の連絡先は 104-0031 東京都中央区京橋 3-6-18．Tel. 03-5250-6571．　（金井弘夫 H. KANAI）

□森島啓子（編著）：**野生イネの自然史【実りの進化生態学】**　A5．215 pp．2003．¥3,000+ 税．北海道大学図書刊行会．ISBN 4-8329-8061-0

わが国にはイネ属の野生種は存在せず，われわれの主食の米は，世界の熱帯・亜熱帯に広く分布するいくつもの野生種に，その源を求められるという．本書では，アジア・アフリカ・南米を股にかけた，国際調査など数々の研究成果が，編者をはじめとする 11 人の文で披露される．

序章に続いて，I．野生イネの生活史，II．生きるためのさまざまな適応，III．野生イネの過去・現在，そして未来，の三部より成る．

栽培種にかかわる野生イネは，アジア・アフリカ・オーストラリアに産する，水生を基本とする数種で，その生活様式や繁殖行動についての研究成果を述べる．実験圃場で，南米の *Oryza grumaepatula* のアマゾンの系統だけが，茎が折れ易い理由が，アマゾン川の大増水を実見して，はじめて理解できたという話は，現地調査の重要性を物語っている．

プラントオパールは考古学の分野では，稲作の証拠として重視されているが，本書では重きを置かれていない．その理由は，著者らの研究がそこまで手を拡げられるほどの余裕がないこと，雑草である野生イネと栽培イネを区別するようなプラントオパールが，識別されていないこと，イネ以外のイネ科植物のプラントオパールの研究が，進

んでいないことなどにあるようだ.

一方，窒素固定エンドファイトの話は，私には新鮮だった．ラオスの，雨水が留まれないほどの急傾斜地の，養分がほとんど無いと思われる乾燥した焼畑で，一つの穂に，ササニシキやコシヒカリの1.5倍も大きい米粒を，200–300粒（前記2品種なら100粒程度）も付けている陸稲に出会い，その理由を考察した結果，窒素固定エンドファイトに行き当たった．エンドファイトとは，細胞間隙など，植物組織内で共生的に生活している原核微生物で，古くはドクムギの中毒菌が例として挙げられているが，研究の進展につれて解釈が微妙に変わっているらしく，私の持つ前世紀の辞典類では，頼るわけにはいきそうにない.

窒素固定エンドファイトの研究は，今後の地球全体の食糧確保にぜひとも必要だが，ラオス奥地の焼畑地帯への再調査はなかなか実現せず，現地当局は森林保護のために，焼畑農民を平地へ移住させる政策をとっているので，手をつかねている間に現場が失われてしまう，と心配している．ここらは，良かれと思った単純な自然保護や環境保全が，それと知らずに自然の多様性を抹殺する結果となる問題で，それらに関わる人達が心しておかねばならないことだろう．実際，著者らが長期の定点観測のために設定した，バンコク近辺のフィールドは，タイの経済発展と共に失われてしまったそうだ.

イネ栽培も機械化が進むと，混在する雑草イネの量が増えて，品質も収量も低下する．米国のような大産地や，人手不足のわが国のようなところでは，近い将来深刻な問題になるだろう．中国は栽培イネの起源や発展について，最も重要な地域であり，今後の研究交流が期待される.

イネに限らす，集団遺伝の研究は，実験圃場に集めた「純系」を，制御された条件下で行われた研究成果が，より「正確」と思われがちだが，それらが「純系」であればあるほど，自然の進化を反映するとは限らないので，フィールドにおける継続的観察・調査は欠かせない，としている.

ゲノムやDNAに関する話は，もちろんたくさん盛り込まれていて，私には難しい本だが，今日の常識を持つ人なら，イネに限らず，様々な研究対象に当てはめられる多くのヒントを得られるだろう．巻末に引用・参照文献275件が，テーマ別にリストされている．館岡亜緒氏のイネ属についての作品が7件引用されていて，口数が少なく，短命だった彼のことを思い出した.

（金井弘夫 H. KANAI)

□本多郁夫：**植物生態観察図鑑・おどろき編**
B5. 191 pp. 2014. 全国農村教育協会. ¥2,950+税.
ISBN 978-4-88137-176-3

まず先頭17頁におよぶ，ウマノスズクサのカラー写真に引きつけられる．主に花部のアップなのだが，開花の様子を時刻入りで示してある．それから花筒のいろいろな部位での横断や縦断で，内部の毛の様子，基部の膨大部のおしべやめしべ，そこへ閉じ込められたハエの群，送粉の様子，子房の中の胚珠の状態，果実が熟しても，風散布型の種子はなかなか飛ばず，おまけに胚の大きい種子と小さい種子が1:2くらいの割合にあって，播種すると前者はよく発芽するが，後者は発芽率が低いこと，地下茎がよく発達していて，無性繁殖が旺盛なこと... などが，一々カラー写真で説明されている．他にも，コシノコバイモ，ショウジョウバカマ，ミズバショウ，ナニワズ，クロモ，サネカズラ，オニバスなど，17種類の植物が，同様の丹念さで記録されている．カラスノゴマの花の構造を，これほど詳細に記録した人はいないだろう．ヤドリギについてもまた然りである．低倍のカラー顕微鏡写真，ときには電顕写真も混じるが，多くは，誰でも「俺だってそのつもりになれば...」できそうなものばかりである．しかし，やはり作ってしまった人はエライと思う.

表紙に「植物生態観察図鑑」とあるが，「生態」という単語は私にはちょっと抵抗がある．生態を「生きざま」と解釈すれば，それはそれで受け取れるし，イソスミレやサツキや砂丘のお立ち台のはなしは，生態を語るにふさわしい．近頃は植物生態学というと「植物社会学」と受け取る人が多いようだ．私が教えに行っていた専門学校の学生は，植物観察や分類は名前調べ，植物調査は植生調査という，先入観があるようだった．本書で扱うのは本来は分類•形態の分野に属する現象の「観察・記録」が主体になり「生態」という文字を入れる必要を私は感じない．だから「植物観察図鑑」の方が内容に合っていると思う．もっとも表題というものは，購買意欲を刺激する必要があるので，販売戦略上こういう名になったと思う.

本書のどのトピックを見ても、同好会誌や専門研究会誌に発表するに足る内容である．専門研究会誌は本誌を含め，国際的発表誌を目指して，ず

っと以前にみんな衣替えし，アマチュアが気安く立ち入れる雰囲気が無くなってしまった．同好会誌は観察会や貴重・外来植物や新発見植物の記録に忙しく，こういう「地道な」記録・研究は投稿しにくい，あるいは持て余される雰囲気があるのではないか？こういう作品が同好会誌に続々と現れれば，専門誌はあわてることだろう．

あとがきで著者は「何万コマものスライドを作ったけれど，これを後続の人の利用に供するためには，一コマ一コマのデータを整理して付けねばならない．それをやる時間はもう残されていないので，自分のホームページに公開した．しかしやはり印刷物として残すことの重要性に気付き，その一部を自費出版したところ，続編の希望が多かった．一方，著者のホームページを見た，表記出版社の編集者からの働きかけで，本書ができ上がった」とのこと．いずれは消滅してしまうあまたの HP の中から，後世に残すに足りる作品を見出してくれた編集者に，御礼を申し上げたい．参考文献は 5 頁に主要なものの一覧があり，これに加えて各トピックの末尾に，関係文献が挙げてあって丁寧だと思うが，本の場合には，これらは巻末に文献表としてまとめておく方が便利だと思う．ただし同じ文献があちこちで引用されるので，本文中では頁数まで指定する必要がある．

著者が本書を出版しようとしたきっかけは，里見信生氏の遺品のすべてが廃棄されたのを知ったためだという．遺品の処置は，本人と遺族の意志や人生観が優先されるべきもので，他人が口を挟めない．私がしばしば言うように，電子媒体記録は「残らないモノ」なので，自分の作品が他人を益するに足ると思うなら，やはり印刷物にしておくことが望ましい．自費出版物はこれ迄何点も取り上げたが，どうも文句を付ける余地が多く，せっかく発表してくれた著者の足をすくうようなことを，つい書いてしまう．やはり，プロの目を通した作品の方が落ち着けるのだが，経営上の利害がからむので，難しいところである．

（金井弘夫 H. KANAI）

□ Yu JIA and Si HE (eds.): **Species Catalogue of China. Vol. 1. Plants. Bryophytes**. A4. 525 pp. 2013. Science Press, Beijing. ISBN 978-7-03-036915-4

中国にこれまでどのようなコケ植物の種が記録され，現在それらがどのように扱われているかを知ることは日本のみならずアジアのコケ植物を調べる上で欠かせない．東アジア及びアジアで共通する種が多いからである．中国全体の種を扱っている文献には比較的最近のものでは 1994 年から刊行されている「中国苔蘚誌」があり，蘚類 8 巻，苔類・ツノゴケ類 4 巻の計 12 巻からなる予定で，蘚類 8 巻は刊行済で，苔類の 2 巻目にあたる第 10 巻 (2008) までが刊行されている．英語版では服部植物研究所報告に掲載された Piippo (1990) と Redfearn et al. (1996) によるそれぞれ苔類，ツノゴケ類と蘚類のチェックリストがとても有用であるが，前述の「中国苔蘚誌」の蘚類編を原則もとにした ”Moss Flora of China” (1994–2011) が科学出版社とミズーリ植物園との共同により刊行されている．また，一冊の図鑑としては，高 謙・賴 明洲（編著）の「中国苔蘚植物図鑑」(2003)，呉 鵬程・賈 渝・張 力（編著）の「中国高等植物第一巻（苔蘚植物門）」(2012) がある．

本書は「中国生物物種名録」という書名が示すように，中国の生物総目録の一環として企画されたもので，植物，動物，菌物（菌類）の三巻全 27 冊の刊行が予定されている．中国科学院北京植物研究所の賈 渝博士とミズーリ植物園の何 思博士による本巻の内容は，初めに中国のコケ植物の分布と区系，所属の変更，問題のある種名の取り扱いなどが概略されている．中国語で書かれているが種，属，科名が学名で書かれているため理解しやすい．以後，第一部として蘚類が，第二部として苔類とツノゴケ類が扱われており，これが本書の主体である．採用されている分類体系は Frey (2009) の ”Syllabus of Plant Families. Part 3 Bryophytes and Seedless Vascular Plants” であり，分類順に中国産全種が掲載されている．各属について属のタイプ，世界の種数，中国の種数が記載され，また各種については中国名，学名，シノニムのリスト，原記載文献，タイプ情報，生育環境，国内分布の順でまとめられている．

本書は中国のみならずアジアのコケ植物を知る上で有用な文献である．内容とは関係ないが，使用されている紙の質も良く，従来のものとは格段の差がある．本書は次の書店で購入でき，価格は 10,395 円（税込）である．亜東書店 (www.ato-shoten.co.jp)

（樋口正信 M. HIGUCHI）